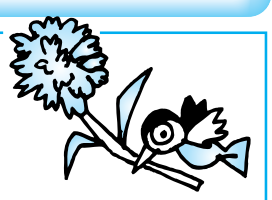
# 雨のち晴
## ~わたしの子育て日記~

子育てをしていると、晴れの日もあれば雨の日もあります。どんな長雨もいつかはやむ日がやってきます。そして雨雲の切れ間からお日様が顔をのぞかせた時、私たち親も、人としてひとまわり成長しているのかもしれませんね。そんな子育ての１ページをご紹介します。

### お母さん大すき



『お母さんはびょう気でつかれています。でもがんばっていると思います。おこるとこわいけど、やさしいときもあります。こんなお母さんでよかったな』。数年前、作文を目にした私は涙が止まりませんでした。

作文は、私の友人の息子が小学２年生の時に書いたものです。その友人は、思春期のころ拒食症にかかり過食嘔吐を繰り返してうつ状態となって何年も苦しんできました。友人としてつき合ってきた私も心のどこかがズシリと重く、一緒に暗いトンネルに入ったようでした。

彼女は、人と関われない、電話に出られない、自分の子どもですらそばに寄ってくると嫌悪感を覚える…。まさに子育て真っ只中での心の病（やまい）でした。 とにかく頑張り屋で、どんなに体調が悪くても定刻に起きて朝食の準備をする。幼稚園の送迎もする。そうした母親として妻としての最低ラインを自らに課して、ますます窮地に追い込んでいきました。こんな母親をもったわが子が不憫（ふびん）で、彼女は毎日死ぬことばかり考えていたといいます。

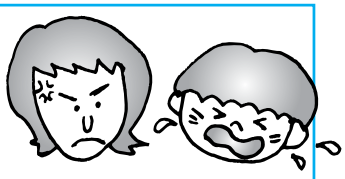
私も外で遊びたい盛りに出かけられない子どもたちが心にかかり、一緒に遊びに連れ出したりしていました。"母親が心身共に元気でなければ子どもは可哀相だ"という固定観念があったからです。けれども、その考えはあの作文を読んで見事に崩れ去りました。子どもは、心を病んだ母親を気づかいやさしい目で見ていたのです。

そして、彼女はわが子の作文と夫の「治らなくてもいい。そばにいてくれるだけでいい」という一言から回復の途についたのでした。

この経験を通して、子どもは母親がどういう状況にあっても大好きで、弱い母親からも学んでいるのだという事に気がつきました。そして、何より私の心の幅をグンと広げることができました。

（M・A）

### "脱、鈍感なお母さん"の誓い



「塾の宿題やったんだけど答え合わせしてくれ！」小５になる二男の言葉に、またか…としぶしぶテキストを受け取った。答え合わせの後はきまって親子ゲンカになるからだ。「途中に一つ式がいるね」私が言うと、案のじょう口をとんがらせてかみついてきた。「そんなもんいらんわ」。ひとしきりもめた後、「塾の先生はこれでいいって言ってたもん」と言う子どもの一言で私のイライラは絶頂に達した。「塾の先生に見てもらったのなら何でお母さんに答え合わせを頼んだの。間違えを指摘するといつもこうなんだから。間違ってても、『まあよく出来ました』と言ってほしいのかね！ それじゃあ答え合わせにならんじゃない」そうきつい言葉を返した後、自分で自分の言葉にはっとした。この子は本当にこれを望んでいたのかもしれないと。がんばって塾の宿題をやったということを私に褒（ほ）めてもらいたくて、答え合わせを頼んでくるのではないかと。そういえば今まで歳の離れたお兄ちゃんのことを優先して、いつまでも彼を小さい子どものように扱ってきたように思う。僕も大きくなってこんなにがんばっているよという彼の精一杯のアピールに気づかず怒ってばかりいて、ほんとに鈍感なお母さんだったわ。その夜、ひとり寝床の中でつくづくそう思った。そんな私に、あの子は懲りずに答え合わせを頼み、鈍感なお母さんを脱するチャンスを与え続けてくれていたのだ。お母さん今度はしっかりあなたの気持ちを受けとめるからね。そう心に誓いました。

（P.N. うっかりママ）

### 投稿募集

このコーナーではみなさんの子育て体験談を募集しています。

つらかったこと・嬉しかったこと・今の話・昔の思い出など、なんでも結構ですので、投稿をお待ちしております。なお、掲載にあたり紙面の都合上多少整理させていただくことがあります。ご了承下さい。